2023 年 8 月 11 日

日本現代中国学会第 73 回全国学術大会のご案内

会員各位

2023 年の日本現代中国学会全国学術大会は、10 月 14 日（土）と 15 日（日）の両日、神戸大学人文学研究科との共同主催で神戸大学六甲台第２キャンパス瀧川記念学術交流会館（１日目）および人文学研究科（２日目）において対面のみで開催されます。

今年の共通論題のテーマは「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」です。

大会プログラム

2023 年 10 月 14（土）共通論題・懇親会

12:00～	受付（瀧川記念学術交流会館一階）
13:00-18:00	共通論題：「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」（瀧川記念学術交流会館大会議室）
19:00～	懇親会（瀧川記念学術交流会館一階ホール）

2023 年 10 月 15（日）自由論題・分科会

9:00～	受付（場所：A 棟一階ロビー）	
場所	会場①：文学部 B232	会場②：文学部 B233
午前の部 10:00-12:00	自由論題 1 経済・社会	自由論題 2 文学・宗教
午後の部① 13:00-15:00	自由論題 3 歴史	自由論題 4 文化
午後の部② 15:15-17:15	分科会「建国初期の中国社会の再構築」	自由論題 5 ジェンダー

共通論題のプログラム

日程：2023 年 10 月 14（土）共通論題・懇親会

開催時間　第 1 部 13:00-15:15、第 2 部 15:30-18:00

場所：神戸大学（文学部）

開催方式：対面のみ（ただし、新型コロナウィルスの流行状況により、オンライン開催となる可能性がある）

共通論題次第

司会・趣旨説明：

13:00～13:10　濱田麻矢（神戸大学）

共通論題趣旨：

ジェンダーの問題は誰にとっても他人事ではないはずですが、核心的な議題として学際的な場で論じられることはなかなかありませんでした。しかし現在、ジェンダー規範それ自体に向かいあうことの重要性が今までになく認識されるようになっています。

2017 年に米国を揺るがせた#metoo 運動は東アジアにも波及し、中国や日本を含む各国でセクシャルハラスメントへの告発が行われるようになったことはまだ記憶に新しいものがあります。性的少数者への差別、同性婚合法化を含む婚姻の多様化、雇用や教育格差への対処、根強く残る売買婚などなど、既成のジェンダー規範に端を発する問題は枚挙にいとまありません。ジェンダー規範とは、ときには政治のあり方、国家そのもののあり方を問う大きなイシューになりうることは、現在の日本でもリアルに感じられるところです。

今回は、中国語圏が現代化を進める過程で、ジェンダー規範がどのように変化したのか、法律、経済、文学、文化四つの角度から検討します。諸会員それぞれの研究分野にジェンダー規範の問題を重ねてみると、また違った視野が広がるかもしれません。ぜひ多くの方の、積極的な参加をお願いいたします。

第 1 部　報告次第：

13:10～13:40　星野幸代（名古屋大学）
13:40～14:10　小笠原淳（熊本学園大学）
14:10～14:40　大橋史恵（お茶の水女子大学）
14:40～15:10　鈴木賢（明治大学）

報告要旨：

踊る女性へのまなざし―革命バレエ表象におけるエロティックな欲望

星野　幸代（名古屋大学）

「舞踊とジェンダー」をキーワードとした場合、(1)封建制、フェミニズム、ジェンダー等を主題とする舞踊の表現。(2)芸術と女性身体の消費の問題。(3)踊る男性、踊る女性に対するステレオタイプ。(4)社会における舞踊の機能・利用・影響のうち、ジェンダーと関わること、等の研究対象が考えられるだろう。本発表では「(2) (4)」を意識しつつ、文芸作品に現われた革命バレエの表象を対象とする。仮説としては、文化大革命期のバレエを踊る女性ダンサーという素材を採用した場合、女性作家の小説は、女性から女性身体への同性愛的な欲望という表現を開拓したのに対し、男性監督による映画はハリウッド的な女性身体へのフェティシズムを再生産する傾向があるのではないか。本発表ではこの仮説のもと、舞踊家と舞踊シーンが登場する厳歌苓と林白の小説、および映画『妻への旅路』(2014)、『芳華』（2017）の舞踊シーンを取り上げ、文革期のバレエ映画も照合しつつ検討したい。

文学テクストにおける中国女性の肖像――描く身体と描かれる身体

小笠原　淳（熊本学園大学）

中国女性の身体は、古来より髪、化粧、服飾、纏足をめぐるセクシャリティや、結婚、出産といった生殖の要求によって規範化され、歪められてきた。現代文学のテクストに描かれる女性たちにも、伝統的なジェンダー規範をめぐる身体の葛藤が表象されている。

ヘルマン・シュミッツが身体を絶対的な場所において見出される現象と定義したように、身体と時空とは深いかかわりをもっている。文学テクストにおいても、それぞれの時代と空間において異なる身体が表象されるが、彼女たちの身体は自己犠牲などの伝統的、受動的な女性観と近現代における行動主体への衝動のはざまで揺れつづけているところに一つの共通項を見出すことができる。本報告では、蕭紅、史鉄生、海男、余秀華、ケン・リュウなどの詩人及び作家の文学テクストに描かれた異なる時代の中国女性を、主体・客体としての身体の角度から分析し、中国女性の肖像に文学研究の視点から迫っていきたい。

植民地期香港における中国系家事労働者の移動と生存
――「ケア」と「クィア」の交差に着目して――

大橋　史恵（お茶の水女子大学）

フェミニスト社会科学の領域では、経済のグローバル化の下で 1990 年代ごろから「移住労働の女性化」と呼ばれる現象が注目され、香港はフィリピンやインドネシアの移住家事労働者を多く受け入れている都市として知られるようになった。しかしフィリピン女性たちの受け入れが始まる 1970 年代より前から、香港のケア・エコノミーが移住女性たちによって支えられてきたという事実に目が向けられることはほとんどない。これに対して人文学領域では、珠江デルタにおける近代製糸産業の発展のなかで経済的に自立し生涯非婚を誓って女同士で暮らした「自梳女」たちの少なからぬ数が、1920 年代から 30 年代にかけて香港や東南アジアへと移動し、住み込みの家事労働者として働いていたことが知られている。本報告では、この二つの異なる研究領域における「ケア」と「クィア」という関心を交差させながら、植民地期香港における移住家事労働者の存在をとらえなおしていく。とりわけ 1950 年代から 60 年代にかけて、「自梳女」たちが女同士の共同性をどう保持したのか、また老後の身の処し方をどう考えていたのかを、さまざまな資料の検討を通じて考察してみたい。

中台における『性別』規範の変容

鈴木　賢（明治大学）

台湾では 2000 年代以降、性別平等が生理的な男女（両性、sex）の平等を超えて、性的指向、性自認、性的特徴などを含む多義語へと拡張し、それが法にも反映されるようになった。具体的には、性別平等教育法（2004 年）、性別就業平等法（2008 年）、同性婚法（2019 年）、そして現在、起草が進む包括的差別禁止法（平等法）といった諸法である。憲法法廷の判決では宗族集団の財産の継承権を男子にしか与えていない法規定を一部違憲

とするなど（112 年憲判字第 1 号)、両性の平等についても一層の進展が見られる。この結果、台湾はアジアでもっともジェンダーギャップの小さい法域になっている。

他方、習近平体制下の中華人民共和国では中華の優秀な伝統文化、中華民族の伝統的な家庭美徳の発揚といった言辞を以て、儒教的な性別規範、家族規範への回帰が顕著になっている。これは 2021 年から施行された民法典婚姻家庭編が、優良な家風の樹立、家庭の美徳の弘揚、家庭文明建設の重視を唱い（1043 条)、離婚の自由を制限する離婚冷静期間（1077 条）を新設したことなどに表れている。

本報告では両岸における法に表れた性別規範の変容／不変容の実情を整理し、その背後でいかなる機制が働いているかを検討する。

参考文献　拙著『台湾同性婚法の誕生』(日本評論社、2022 年)、拙稿「LGBTQ＋は中国でどう生きているのか」兪敏浩編『中国のリアル』(晃洋書房、2023 年)。

15:15～15:30　休憩

第 2 部　討論

コメント：

15:30-15:45　三須祐介（立命館大学)

15:45～16:00 石川照子（大妻女子大学)

16:00-18:00　全体ディスカッション

19:00～　懇親会

自由論題プログラム

日程：2023 年 10 月 15（日）

開催時間：午前の部 10:00-12:00、午後の部① 13:00-15:00、午後の部② 15:15-17:15

場所：神戸大学（文学部）

午前の部 10:00-12:00

自由論題 1　経済・社会

座長　中川 涼司（立命館大学）

大西 広（慶應義塾大学・名）

「中国ラオス鉄道開業 1 年余の事業成績と今後について」

許 俊卿（大阪大学）

「中国における PM2.5 問題を巡る市民の主体的な認知過程に関する実証研究
－メディア報道とリスク認知の関連から読み解く－」

任 泰然（立命館大学・院）

「中国の県域都市部における施設による高齢者介護サービス
－吉林省の公主嶺市と舒蘭市の事例を中心に－」

自由論題２　文学・宗教

座長１　松浦 恆雄（大阪公立大学・名）

高 尚（神戸大学・院）

「乱世の恋と治世の恋－黄碧雲『盛世の恋』における張愛玲の影響－」

田中 雄大（東京大学・院）

「施蟄存の詩学－情緒の発露としての新詩理解から『現代』的な詩作の肯定へ－」

座長２　石川照子（大妻女子大学）

佐藤 千歳（北海商科大学）

「2000 年代以降の中国社会における宗教意識および宗教実践の変動」

午後の部① 13:00-15:00

自由論題３　歴史

座長　高見澤 磨（東京大学）

団 陽子（日本学術振興会）

「対日戦後処理『中間賠償』と米華関係についての再考」

横山 雄大（東京大学・院）

「1970 年代末から 1980 年代前半にかけての中国漁船の日本近海進出」

石塚 迅（山梨大学）

「中国と法治について対話ができた頃－中国湖南省の行政（法）改革 2007-2011－」

自由論題４　文化

座長１　城山 拓也（東北学院大学）

劉 娟（横浜国立大学・非常勤講師）

「中国の絵本市場形成前における日本の絵本観の受容－『幼児読物研究』を中心に－」

方 園園（神戸市外国語大学・院）

「木版画から漆芸へ－沈福文の転身に関する歴史的検証－」

座長２　大橋 史恵（お茶の水女子大学）

沈 思遠（神戸大学・院）

「中国における出稼ぎ家事労働者の移動と生活
－労働者のライフストーリーを通じて－」

午後の部② 15:15-17:15

分科会「建国初期の中国社会の再構築」

司会者　角崎 信也（一般財団法人 霞山会）
報告者　鄭 成（兵庫県立大学）
「建国初期の思想的統合への国民の受容について」
河野 正（国士舘大学）
「1950 年代河北省における共産党の人材育成と『浸透』」
杜崎 群傑（中央大学）
「毛沢東の人民代表会議・人民代表大会観－暴力と民主・警戒と協調の狭間で－」
討論者　上野 正弥（神戸市外国語大学）
周 俊（同志社大学）

自由論題５　ジェンダー
座長　神谷 まり子（日本大学）
孫 楚珮（神戸大学・院）
「1920 年代における市民階級の女性想像－『啼笑因縁』の関秀姑を中心に－」
何 憶鴿（三重大学）
「『小資』の女性ジェンダー化現象に関する考察
－1990 年代中国の文芸領域における男性性のヘゲモニー闘争を背景として－」
姜 文浩（東京学芸大学・院）
「『十七年』時期の革命映画に見る女性像
－『中華女児』と『不屈の人々』を中心に－」

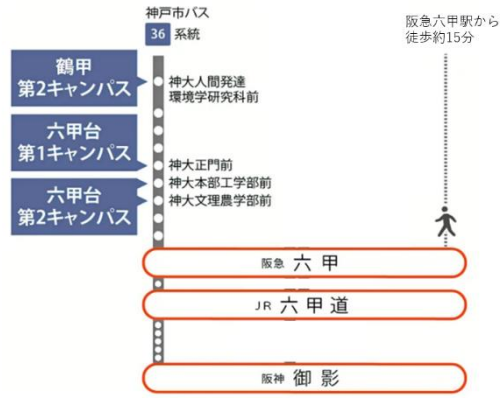
■書籍販売 両日とも中国関係書店による書籍の出張販売を予定しています。是非ご利用ください。

■大会実行委員会からのご案内
１.大会への出欠はウェブからの登録になります。入力の詳細は学会 HP をご覧ください。
２.キャンパスへの車両入構は制限されています。徒歩または公共交通期間をご利用ください。
３.宿泊施設についてはご自身で早めにご予約ください。
４.神戸大学構内は、決められた喫煙所以外は禁煙となっています。
５.台風などで開催校が休講するような事態が発生した場合、開催の有無を朝 6 時の段階で学会のウェブサイトに掲載します。
６. 託児サービスの利用申し込みは１週間前までに菅原までご連絡ください。
関西大学 菅原 慶乃
E-mail:sugawara[アットマーク]kansai-u.ac.jp

■開催場所
神戸大学六甲台第２キャンパス
瀧川記念学術交流会館（1 日目）、人文学研究科 A、C 棟（2 日目）

（神戸市灘区六甲台町 1-1）

アクセスマップ



キャンパスマップ

1 日目（10/14）は 100 の建物、2 日目（10/15）は 96、97 の建物です。